

# くまもと経済

C 表紙の人  
Cover Story

丁道夫  
熊本県経済農業協同組合連合会会長  
“オール熊本”で県産ブランド強化

1 2022  
月号

VOL.487

必読  
業界・分野トップに聞く熊本の2022年  
**熊本展望**  
2022

新春グラビア

★ 熊本を拓く **新・成長基盤** 半導体・コロナワクチン  
道路・都市・新産業

広告企画 新春誌上名刺交歓 / 熊本学園大学同窓会・志文会 / 宇土高校創立100周年特集



# DXでイノベーションを起こしたい

崇城大学IoT・AIセンター 星合 隆成 センター長

ほしあい たかしげ/工学博士・P2P提唱者、1962年1月生まれ、徳島県出身。国立大学法人豊橋技術科学大学卒、国立大学法人電気通信大学博士(工学)、1986年4月、日本電信電話(株)入社。NTT研究所主幹研究員・参与。2012年3月同社退職後、同年崇城大学情報学部教授に就任、2020年4月、崇城大学IoT・AIセンター長、早稲田大学招聘研究員、コンセプトラボ株式会社取締役会長、SCBイノベーションアカデミー校長、(一社)SCBラボ所長・理事

「DXにとって大切なことは、単なる効率化やデジタル化ではなく、ビジネスにイノベーションを起こせるかが重要です」と語るのは崇城大学IoT・AIセンター長を務める星合隆成崇城大学情報学部教授。昨年同センター長に就任後、DXが地方創生のカギを握るとして、地元企業、大学、自治体を交え、DX推進に向けたプラットフォームづくりに取り組んでいる。

「多くの企業がDX化に関心を寄せ、最新のデジタル技術の導入にも積極的な姿勢を見せていますが、ほとんどの場合、従来の業務の効率化、省力化にとどまっているのが現状です。私も提唱するDXはあくまでビジネスにイノベーション(変革)をおこすことが大切だと考えています。デジタル化はあくまでそのため手段です。」

いわゆる「失われた20年」の間に、米国は平均所得を1.7倍に増やしました。理由はGAFAIに代表されるIT企業がイノベーションを起こし、全く新しい産業を次々に生み出したからです。日本はそうしたイノベーションを起こすことができませんでし

た。中小企業にとつてもこうしたイノベーションを起こすことができなければ、国内市場が縮小していく中、利益を上げるビジネスプランをつくるのが難しくなるでしょう。」

## カテゴリーに分け具体例に学ぶ

DXを推進していくための具体的な取り組みについて「新機能の追加」、「新商品の開発」、「会社のあり方やビジネスの変革と新たな文化の創造」の3つのカテゴリーに分け、それぞれのカテゴリーごとで意見を出し議論を進めていくことと、DX導入事例から学ぶことが必要だと話す。

「DXを技術的な側面で理解している人と、DXは組織やモノの考え方を変えていく理念だと理解している人が、互いに話をしても意見がかみ合わないのは当然です。そのため、DXをカテゴリーに分けて論じる必要があります。そうすることで、だれもが議論に参加できる環境をつくることができます。」

その結果、組織内の狭いグループだけでなく、異分野の人々とも議論を交わすことも可能になります。そこに新たなアイデアが

生まれ、ビジネスが育っていくと考えています。

もう一つの具体例が導入事例からDX化の明確なイメージを得ることです。具体的な事例を知ることによってアイデアが湧き、自らの組織の中でも活用できる理念や哲学を拾い出すことができます。」

## 人材育成が今後の課題

さらに、中長期的な視野に立ったブランドデザインを描ける人材育成も今後の重要な課題だと。

「中長期のデザインがないと、DXは単なる効率化の手段にとどまり、本来の役割を發揮できません。新たなビジネスモデルを生み出す構想力が今必要とされています。そのためにも、すぐに役立つノウハウではなく、今後大きな可能性につながるビジョンを描ける人材育成が必要です。同センターではそうした人材育成に向けた講座の開設ならびに、人や情報が交わるハブ(結節点)としての役割を果たすことで、地域の活性化に貢献するとともに、熊本発のDXを発信していきたいと考えています。」(徳山文雄)

# 大会の様子を動画投稿サイトで配信

## 崇城大学ビジネスコン

崇城大学(熊本市西区池田4丁目、中山峰男学長)は12月11日、県との共催で「第7回崇城大学ビジネスプランコンテスト」最終選考会を開催した。

熊本県内の高校、高専、専門学校、大学に通学する高校生、高専生、専門学校生、大学生を対象としたビジネスプランコンテストで、応募総数101チームから、一次、二次審査を通過し最終選考に残った10チームが、同大学池田キャンパスのSOLAホールを会場にプレゼンを披露(1チームがオンラインでプレゼンに参加)。審査の結果、チームAの平田竜一さん(崇

城大学大学院工学研究科応用微生物工学専攻)が発表した「規格外野菜を用いた機能性パウダーの開発と販売」が優勝。合わせて熊本県知事賞を受賞し、賞金50万円を獲得した。準優勝(賞金10万円)は「熊農6次産業化計画」を発表したチーム・養豚プロジェクト(県立熊本農業高校)が獲得。高校生チームでの準優勝は、同コンテストで初めて。今大会でのプレゼンの様子は、感染症対策として、ネット動画投稿サイトでも配信した。



▲優勝者あいさつで思わず顔がほころぶチームAの平田竜一さん



▲ステージでプレゼンを披露するチームAの平田竜一さん



▲当日は、感染症対策の一環で、審査員はオンラインでの参加。写真はステージ上のモニターを通してプレゼンターに質問する審査員



▲記念撮影に応じる平田竜一さん(中央)、中山峰男学長(左)、内藤美恵県商工労働部産業振興局長



▲準優勝に輝いたチーム・養豚プロジェクト(県立熊本農業高校)。高校生の準優勝獲得は大会初



▲「起業家甲子園」への挑戦権が与えられるNICT賞を受賞したチーム・Eneclus Design(崇城大学)